

義務年限期間中の臨床研究論文作成

☆推薦文☆

納屋樹先生、臨床研究論文 accept おめでとうございます。納屋先生の粘り強い努力の賜物だと思えます。本論文は急性虫垂炎患者の術前総ビリルビン値 (T-Bil) の上昇と2つのCT所見(糞石または虫垂周囲脂肪織の毛羽立ち像)の組み合わせにより緊急手術が必要となる壊疽性虫垂炎の術前診断が可能であることを示しています。私は消化器外科研修医時代から現在に至るまで数多くの急性虫垂炎患者の診療に携わってきましたが、手術適応を考えるとときに術前総ビリルビン値に着目したことはありませんでした。急性虫垂炎は外科医にとっては診断治療法がほぼ確立した common disease ですが、納屋先生は総ビリルビン値の上昇に着目し、とてもユニークな論文となっています。私も本論文のお手伝いをさせていただき大変勉強になりました。日常診療の合間に論文を作成するのはとても大変ですが、自分の気づきや考えを論文発表できることは非常に素晴らしいことだと思います。“academic surgeon”を目指して、ますますのご活躍を期待しております。

外科学講座 消化器一般移植外科 堀江久永

都立多摩総合医療センター外科／神津島村国民健康保険直営診療所

納屋 樹 (東京都 36 期卒業)

今回CRSTの先生方にサポートいただき、原著論文“Clinical predictors of gangrenous appendicitis: elevated total bilirubin level and computed tomography scan findings”がAcute Medicine & Surgeryにacceptされました。この論文は研究を始めてから4年程経過し、いわゆる“お蔵入り”しそうだったものを諦められずにCRSTに相談したことでacceptにこぎつけました。



外科学講座・堀江久永教授に指導医となっただき専門分野の御指導を、また産婦人科学講座・松原茂樹前教授からも論文内容全般の御指導をいただきました。

当初大学のCRSTに相談してよいものかと逡巡しましたが、いざ相談しやり取りが始まると大変親身に相談に乗っていただきました。投稿前の準備における議論はreviewerとのやり取りさながらの非常に実践的なものであり、実際のreviseの際にはこの議論の要点をそのまま回答することとなりました。rejectされた時は多少自信を無くし、方向性を変えた方がよいのではないかという考えも浮かびましたが、的確に方向性を示していただきました。最終的には外科学講座・Alan Lefor教授からも英文校正も含めた助言をいただき満足のいく形に仕上がりました。

研究のきっかけは私が研修医時代のER診療で経験した患者から得た疑問から始まりました。急性虫垂炎で総ビリルビン値(T-Bil)が上昇していたことに疑問を感じたことに端を発します。外科レジデント1年目に学会で発表しました。

翌年より離島勤務となり、時間的には外科レジデント時代よりも余裕があったため一応の原稿の形にはな

りました。しかし、このタイミングで前所属病院から論文発表時の院内倫理委員会認可が必須となり、結果的にここから3年間の離島勤務の間に倫理委員会申請すら出せずじまいのまま外科レジデントに復帰することとなりました。

倫理委員会認可後やっと投稿という段階になりましたが、所属科にはcurrent active writerがおらず一人で戦いは困難が予想されました。そこで以前先輩が相談をしていたCRSTを頼ることにしました。結果は先述した通りです。

東京都の義務年限9年間の内訳は、初期臨床研修2年間、離島勤務4年、都立病院での専門研修3年となります。この間偶然active writerが近くにいなければ、指導を受けることもなれば論文を書くきっかけすらつかめない可能性もあります。医局に所属できない環境ではCRSTの存在は非常に大きなものでした。

今回の論文を通して学んだことを幾つか記します。

- ①綿密な計画・準備の重要性：研究立案から全体を見通して立案し計画的に行う重要性を学びました。特にデータの取り直しや追加、統計処理のやり直しには膨大な労力を要します。研究において行き当たりばったりはよくないことを再認識しました。
- ②経験豊富な指導医が必要：論文内容が伴っていることは大前提として、英語原著論文では投稿雑誌の選定、reviewerとのやり取り、rejectされた後の方向決めなどやはり経験豊富な方のアドバイスが必要と感じました。全てを一人でやりきるにはさらに経験が必要です。
- ③「全体」を見通せる力：①とも重複しますが、研究の「全体」、論文の「全体」など、実際に作業しているとその部分に集中してしまい全体像が不鮮明になりがちです。
- ④速さ：指導医からのレスポンスはとても早かったです。自分もすぐにレスポンスをしようと思うけれど、日常診療の合間に内容を吟味しているとどうしても時間がかかってしまう。作業中はこのジレンマでした。速さと内容の質、これをどう両立していくかが今後の課題です。
- ⑤言語化する能力：論文作成の大半はへき地で行いました。PubMed等を利用すれば情報を得るのは難しくない時代になりました。一方、指導医とのメールのやり取りでは、自分の主張したい点を日本語・英語問わず言語化することの難しさを痛感しました。直接会って議論することができない分、ニュアンスも含めて言語化できる能力を鍛える必要性を感じました。

私の目標は“academic surgeon”になることだ。一人前の外科医になるだけでなく、日々の診療で疑問に感じることを忘れず、常に新規性を求める姿勢を怠らない。新たな手術方法や発見があった場合、それをアウトプットして多くの医師に知ってもらうためのツールとして論文を書く姿勢を持ち続けたい。そんな外科医を目標として今回得た経験を糧にして頑張っていきたいと思います。

最後になりますが、この場をお借りして御指導いただきました堀江先生、松原先生、Lefor先生、CRSTの方に感謝申し上げます。

地域医療オープン・ラボNews Letter原稿募集

地域医療オープン・ラボでは、自治医大の教員や卒業生の研究活動を学内外へ発信するために、「自治医科大学地域医療オープン・ラボNews Letter」を定期的に発行しています。

<http://www.jichi.ac.jp/openlab/newsletter/newsletter.html>

- ★ 自治医大の教員や卒業生の研究活動をご紹介ください
- ★ 自薦・他薦を問いません
- ★ 連絡先：地域医療オープン・ラボ openlabo@jichi.ac.jp

[発行]自治医科大学大学院医学研究科

地域医療オープンラボ運営委員会

事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1

TEL 0285-58-7476/FAX 0285-44-3625/e-mail openlabo@jichi.ac.jp

<https://grad.jichi.ac.jp/>